

船 団

The background of the cover is a dark, expressive charcoal or pencil drawing. It depicts a boat on a body of water, with a figure visible in the background. The drawing is done with heavy, dark strokes, creating a moody and atmospheric scene. The water is rendered with dark, swirling lines, and the boat is a dark, elongated shape. In the background, there's a figure that looks like a person sitting or standing on a structure, possibly a boat or a pier. The overall style is abstract and evocative.

第 121 号

特集

俳句と音楽

[連載 エッセイ]

- 4 日本語ノート⑦おはし 森山卓郎
-
- 6 今日の川柳④背中の毛 芳賀博子
-
- 18 私と俳句①反骨と悲しみ 高木貞重
-
- 20 映画に恋して、俳句に恋して①作品の届け方 衛藤夏子
-
- 60 会員リレーエッセイ①楽しみながら 星河ひかる
-
- 62 会員リレーエッセイ②川崎彰彦がいた 平井奇散人
-
- 64 会員リレーエッセイ③呑気な本から—不器男出生 谷さやん

[船団フォーラム]

- 80 将棋と俳句 高田留美
-
- 81 北摂句会・鳥居俳句の世界 甲斐いちびん

82 会員作品

- 120 今号の15句 小枝恵美子・坪内稔典・鳥居真里子・火箱ひろ・芳野ヒロユキ
-
- 126 エンジンルーム

表紙・カット/山本真也 レイアウト/松山たかし・阪脇幸夫



[特集]

俳句と音楽

- 22 音子と楽人の俳句・音楽談義(プレリュード) 秋山 泰・衛藤夏子
-
- 24 ミニエッセーと一句
-
- 8 俳句30句 二村典子・井上菜摘子・鶴濱節子・陽山道子・藪ノ内君代

[評論]

- 66 時代と文脈から読み直す⑦
「第二芸術」?の桑原武夫? 鈴木ひさし

[書評]

- 74 船団の会編「船団の俳句」 栗山政子
-
- 76 紀本直美著「俳句とエッセー 八月の終電」 沈 脱
-
- 78 村上栄子著「マーマレード」 小川弘子

甲斐 いちびん

風花にふーわり一語ノーリタン
夜明け前じくじくじと酔芙蓉
目を閉じて目をつくれとや冬薔薇
のっぺららのっぺららら桃が散る
涅槃西風帰去来の辞の巨大空白
春花火微細な覚書降ってくる
海鞘すすり鯨鍋食う蕪村旅

香川 昭子

からっぽのにおいこここひなたぼこ
ひなたぼこつすももいろのあねいもうと
君の影踏んでる踏んでる冬の蝶
アンダンテアダージョラルゴ冬の蝶
音程のひよいとはずれて春隣
とどまってユニボ悠然春隣
春はいまキリンの鼻の穴ひらく

川島 由紀子

百面相は鏡の中に野分晴れ
冬木の芽旅人になる版画展
春蘭の音を拾って調律師
空青く叩いて二月の桜の木
啓蟄の少年ひよいと木に登る
ポストイットくるくる芽吹く木々の夜
シヤム猫の死んだふりして朧月

佐藤 日和太

小寒やおでこ叩いて歩く人
小寒や裏玄関のノブ光る
短日の机の中の秘密かな
母からの下紙を読んだ寒昴
立春の函館つるりつるり
平成やテレビが壁になった春
先生だった車椅子の上の春

●会員作品●

夏冬 春秋

冬の駅水兵リーベ僕の夢
寒晴れは頑張れに似てどこまでも
まっすぐな道でさみしいとか言うな
桜降る朝に憧れてる桜
満開の桜の夜雨に魚卵めく
神様がくれた日よしだ歌います
さくらさくららさくらさくらら

亀山 隴

かまいたちかすかなキスを透けて死す
ワインドウズ上の魔にあめひめはじめ
牡蠣がゆめあなたを咬みたくて牡蠣は
ふくろうのうふふ放射能を浴び
画素やわらかくくるいそう宵の癌
あなたってすけべすべすべ鱈のゆめ
さざんかを壊死しXマージュス

澤田 薫恵

年賀状犬もいっしょに年をとる
足音は凡庸にして松過ぎぬ
熱爛や干物あぶっておらが春
親友はみんな悪友山笑う
居酒屋の褒められてる黄水仙
食卓の疵は十年日脚伸ぶ
春光を巻き込みまきこみ水車かな

谷 さやん

梟の一樹に一羽クリスマス
木に触れて雪の降る日の外歩き
窓はそら色水仙は父の花
本題に入る水仙片寄せる
ごみ箱が空になつて雪が降る
毛皮去る日向に猫の餌置いて
雪の窓暮れる目薬いれている

●会員作品●

津田 このみ

白鳥は胸から声をぼうぼうぼう
駄目な日が続いています暖房強
中年がじりじり囲む白鳥湖
大寒やまた食べすぎの腹さする
消毒のよう東京に春の月
風花やとてもしずかな主人公
人体はちくわ構造春の月

土谷 倫

能登しぐれ丹後しぐれと旅果つる
何なりと申してもみよ冬の鵞
ひとり居も茶粥もよろし寒もまた
春光や舞良戸の棧拭き込まれ
春の日や機器みな白き齒科医院
赤ん坊の腹式呼吸春の月
春星へ回転木馬放とうか

中原 幸子

山の雪おでこで受けて山の鐘
寒に入る赤鉛筆のなげ丸い
比叡より比良をながめる冬帽子
金髪の振袖びゅーん冬青空
わからないことぶかぶかと雲の春
皮あつたところに皮があら椿
うまさうをうまいにこんにやく千切る春

羽田 英晴

もんごとと腹の出ている麦藁帽子
一村を水に浮かべて桐の花
降りそうでふらぬ一日栗の花
みればみなさん紫陽花になつて
白い蓮咲かせて空をプテラノドン
青蛙風に思わずキルケゴル
手に小鳥でんでんむしの三回忌

●会員作品●

津波古 江津

いわし雲胸にちいさい笛がある
くるぶしを包むみずおと紅葉山
旗日とは日がな一日咳をする
そのせつな咳とめてみる此の世かな
咳をしてゆえにわれあり雨を聴く
冬あたたか琥珀の中にたれか居る
ときどき来るだみ声の冬鷗

坪内 稔典

根のように意志のようにも二月の木
桃咲いて熊楠さんと昵懇だ
兄弟の山と山あり春の虹
窓辺には頬杖そしてヒヤシンス
ヒヤシンス窓に接岸してひらく
ふと開くクロッカスとか好意とか
問いに問い問い問い生きてチューリップ

火箱 ひろ

母さんの声の冬めく筑前煮
冬バラのゲート古稀まであと少し
カフェの戸の鈴なんとなくクリスマス
これがそのKYOTOのtofu雪が降る
とりあえず続く男系初鵜
くよくよをやめて鯨の声聞きに
おばあさんはどこへ帰った春の川

陽山 道子

皮ジャンの後ろ姿のしぐれがち
寒月光消息不明の眼鏡たち
春の夜のスーパームーン連れ歩く
春の夜のこむら返りと恋情と
春の夜の余白クレソン伸びる音
辛夷咲くドラムの響く港町
ねこ歩きする春の日の分岐点

●会員作品●

ふけ としこ

枕からことばぞろぞろ春の夜
摘む草の雀の枕だつたかも
土塊は土竜の枕青き踏む
ユトリ口の白き枕に春浅し
薔薇の芽の枕交してのちの色
春暁を枕外してよりの夢
走り根を枕に行基風光る

宮寺 亀

反り返り男星見る寒九かな
釣人のもどらぬ波止や冬ざるる
カラオケバー鬼火がとる駅の裏
マイク置きママを置き去り鎌いたち
山眠る電車の中は僕眠る
着ぶくれて整骨院へ猫歩き
握手する逆さにはめた手袋で

池田 澄子

平仮名と楽譜は読めて雛の客
何処からを空と言おうか蔦若葉
踏みそうにスマレ掴まりそうに君
連翹の手前じゃー又ねの身振り
花の夜の体重計を跨ぐかな
集まってください鬱金桜は八重
膝小僧白く粉を噴き端午の子

植田 かつじ

ハンターの息子はニート冬に入る
看護師の唇触れし温め酒
鷹匠の腕にも降りし聖夜かな
初夢の名句忘れて放尿す
黒豆のツヤのような上司かな
ブラッくな会村を出たら鱈起し
車椅子押す人乗る人着ぶくれて

●会員作品●

村上ヤチ代

決めかねる羽了板市やルパのパン
神戸屋のシナモンロール御講風
聖家族祭ドンクのクロワッサン
ぼる市やポンパドウルのフランスパン
木村屋の小振りあんぱん女正月
メルヘンのサンドイッチや猟名残
ヤマザキのランチパックや渡り漁夫

藪ノ内 君代

なんとなく「うん」と言う小春日の口
冬青空なんにもない日の曲がり角
水仙のふるさとという景色かな
ブラウスに恋情少し水温む
春めいて枝を張る木の向こう側
木にふれるそんなある日を佐保姫と
移動するライフスタイル木の芽時

内田 美紗

短日の午前の長しヘリコプター
年賀状一通よけて束ねけり
人日の笛吹きケトル高らかに
冴え冴えと床の間といふ窪みかな
三寒四温色見本帳開きけり
日脚伸び歩道橋より見てわが家
俳号は持たないけれど亀鳴きぬ

梅村 光明

行く秋とポテトサラダは薄味に
海鼠切る指を切るのもこの感じ
湯豆腐はユダウフと載る目葡辞書
襖より障子は少し民主主義
着脹れて古書店内を動きかね
日脚伸び文庫の著者は思想犯
早春は舌にはりつくオブラート

●会員作品●